



鬼ノ城シンポジウムには多くの歴史ファンらが詰め掛け、議論を熱心に聴講していた

# 鬼ノ城

## 鬼ノ城の築城時期は、 簡単には決められない

### 坪井清足



基調講演を行う鬼城山整備委員会の坪井清足委員長

鬼ノ城は平成13年度から10年間、鬼城山環境整備基本計画に基づき、主に西門周辺を整備してきました。この整備が完了したのを記念して5月29日、市民会

館で鬼ノ城シンポジウムが開かれ、約900人の参加者は整備を振り返りながら、築城時期をはじめ、門や城壁などのつくり・機能について考えました。



狩野久さん



高橋護さん



河本清さん



濱島正士さん



稲田孝司さん

### まだまだ研究が必要

発掘を担当した村上幸雄さん（市埋蔵文化財学習の館館長）が、「鬼ノ城発見！あれから40年」と題して、概要を報告。発見からのあゆみをはじめ、発掘成果から西門や角楼などの特徴を、パワーポイントを使い、いねいに説明しました。鬼ノ城は遺構の残りがよいとし、西門と南門は同規模の大きさでどちらが正門か、角楼の柱の上部構造や

### 築城時期はいつ

基調講演は、鬼城山整備委員会の坪井清足委員長（元興寺文化財研究所長）が「鬼ノ城 調査と整備を振り返って」と題して講演。神籠石遺跡は、築城場所や形状から九州型と瀬戸内型に分けられ、鬼ノ城は後者の一つであると前提を話しました。そして、「九州型の多くは天智天皇時代ごろに作られた。瀬戸内型の鬼ノ城には、その時代以前の百済の築城技術もみられ、663年の白村江の戦い後（天智天皇時代以後）に作られたとは考えにくい」と、鬼ノ城の築城時期は簡単に

決められないとしました。

続いて行われたパネルディスカッションは、「甕つた天空の城 鬼ノ城」をテーマに展開。コーディネーターは元岡山大学教授の狩野久さん。パネリストは、元ノートルダム清心女子大学教授の高橋護さん、元くらしき作陽大学教授の河本清さん、国立歴史民俗博物館名誉教授の濱島正士さん、岡山大学名誉教授の稲田孝司さんの4人。全員、鬼城山整備委員会委員です。

### 計算された城壁

何層にも土を突き固めて作る版築による城壁について、稲田さんは、城壁が直線的で一定の角度で折れていることや、城壁に沿った内外の敷石が平行などから「適当に作ったのではなく、計算された設計に基づいて

計画的に築かれたと考えられる」とし、あわてて築城したものではないとしました。高橋さんは「敷石は、城壁を長期にわたり保持するためのもの」と、城壁の内と外に沿っていねいに施されたと話しました。

### 総合的にデザイン

今回整備の象徴とも言える西門の形状について、濱島さんは「柱の根入りが約2mあり、そこから割り出される掘立柱の高さをはじめ、周囲の城壁の高さ、防御施設ということを総合的に考えあのデザインになった」と説明。また、「城の正門とも考えられ、立派さや威圧感も必要だと考えた」としました。

重要な防御施設とされる角楼を、高橋さんは「守備隊を配置する場所」とし、

建物にはなかったのではとしました。一方、稲田さんは「6本の柱は突出部分の壁を補強するものでは」との考えを話しました。

### 西門のデッキでの見学を

河本さんは、見学者や研究のため、出土した石と追加した石を識別できるように敷石に印をつけたことを報告。また、西門の3階デッキを見学のために年に何回かは開放してもよいのではと提案。市教育委員会の担当者が「工作物であり、むずかしいが検討したい」と、参加者に答えました。

狩野さんは、「まだまだ謎は多い鬼ノ城、またこうした機会をもちたい」と締めました。

問い合わせ 文化課文化財係 ☎0833633

## 適当に作ったのではなく、 計算された設計に基づいて築かれた